

<研究ノート>

16世紀イタリア文法における条件法の扱い

Il modo condizionale in alcune grammatiche del Cinquecento

森田 華奈子

MORITA Kanako

16世紀初頭より、イタリアでは主に書き言葉に関してどのような言語を用いるべきかという議論が盛んに行われた。印刷技術の向上と相まって、北イタリアを中心に言語に関する著作が多数出版された。本稿で取り上げるのは、1800年代末まで続く「言語問題」の序盤に出版された（あるいは当時は未刊であった）文法書である。その中でも後世に最も強い影響力を及ぼしたのが、ピエトロ・ベンボによる *Prose della volgar lingua* 『俗語をめぐる散文』であった。全編を通じて対話形式で綴られるこの作品は同時代の他の作品と比べても、いわゆる教科書的な文法書の体裁とは距離を置いたものである。数ある文法書の中でこの作品が広く受け入れられた要因は複数の視点から見ればべきだが、本稿においてはベンボによって構築された独自の文法体系のうちの「条件法」をキーワードとして、他の作品と比べながらその差異を明確にしていく。

キーワード：ピエトロ・ベンボ、16世紀言語問題、初期イタリア語文法、条件法

はじめに

イタリア語の条件法に相当する語法は、ラテン語には存在せず、ロマンス諸語へと変化する過程で形成されたものである。16世紀に刊行された初期のイタリア語文法における条件法の扱いは、現代イタリア語と比較して大きく異なっているのは当然のことながら、当時盛んに出版された文法書においても、その扱いは様々であった。16世紀の言語問題における代表的な作品であるピエトロ・ベンボの *Prose della volgar lingua* 『俗語をめぐる散文』(以下 *Prose*) を中心に、イタリア語の初期文法記述において条件法がどのように扱われていたのかを検討する。

1. 条件法の形成

現代標準イタリア語における条件法の主な働きは、①ある条件のもとに起こりうる、あるいは起こり得た動作や状態、②伝聞、推測に基づく不確かな事柄、③希望・要求・意見などの語調緩和を表現することである⁽¹⁾。また、過去のある時点から見た未来の事柄を述べる場合に用いる、いわゆる「過去未来」という語法もある。

イタリア語における条件法の形成には3つのパターンが存在する。他のロマンス諸語と同様に、共通しているのは不定詞と動詞 HABĒRE の組み合わせによる迂言法から生じたという点である。まず現代イタリア語の標準的な条件法の語形である、*amerei, ameresti, amerebbe* 等のタイプは、不定詞と動詞 HABĒRE の俗ラテン語の完了形 (*HĒBUI, *HĒBUISTI, *HĒBUI, *HĒBUIMUS, *HĒBUISTIS, *HĒBUERUNT) との組み合わせで生じたものである。一人称単数の場合、俗ラテン語形 *HEBUI の語中音 BU が消失した結果得られた -ei を語尾としている。

LAUDAR(E) > *(H)E(BU)I > lodarei > loderei⁽²⁾

2つ目の *ameria, saria* 等の語形は、主に韻文において用いられた。これは不定詞に動詞 HABĒRE の未完了形 HABĒBAM の簡略形によって形成されたものである。プロヴァンス語からの影響を受けたシチリア派の詩人たちによる使用によって定着したこの語形は、少なくとも1800年代まではその使用が確認されている⁽³⁾。

3つ目は *amara, fora* という形態でラテン語の直説法過去完了から変化したものである。シチリア派の詩人た

ちの作品をはじめ、イタリアの主に中南部に見られる語形である。

このようにイタリア語にとって新規の要素である条件法は、異なる起源に由来をもつ複数の形態が共存することとなった。

2. 15世紀の文法記述

上記の過程を経て生じた条件法は、ラテン語には存在しない概念であったため、イタリア語文法においてその扱いに差が生じることとなった。まずはイタリア語史上で初めて俗語の規則が扱われた著作、レオン・バッティスタ・アルベルティの手になる *Grammaticetta vaticana* 『ヴァチカン小文法』(以下 *Gram.v.*)での扱いを見てみよう。この作品の執筆時期については諸説あるが、1434年から1443年の間とされている⁽⁴⁾。1495年のメディチ家の図書目録に記されてはいるものの、19世紀半ばまで著者不明の作品として日の目を浴びることはなかったため、16世紀の言語問題に影響を及ぼすことはなかった。建築や美術、さまざまな分野で多大なる功績を残した万能人アルベルティは、イタリア語の分野においても革新者であった。彼は、古典古代の文化礼賛の15世紀の人文主義時代において、俗語はラテン語に劣るものではなく、実用的な場面のみならず芸術や科学の分野における使用にも耐え得る規則性を備えた言語であると主張している。16世紀以降の文法書が文学作品で用いられた言語を模範として記述されたものが多いのに対して、*Gram.v.* は15世紀当時の生きたフィレンツェ語が分析の対象であったという点が特徴的である。アルベルティは伝統的なラテン語文法の枠組みに則って、俗語の規則性を記述している。条件法に相当する語形については次のように述べている。

Hanno è Toscani certo modo subienctivo in voce, non notato da è Latini: e parmi da nominarlo asseverativo, come questo: *sarei, saresti, sarebbe*; pluraliter: *saremo, saresti, sarebbero*. E dirassi così, *s'tu fussi docto, saresti pregiato; se fussero amatori de la patria è sarebbero più felici*.

トスカーナ人は言葉の中にとある接続法の用法を持つ。ローマ人によって注目されることのなかったそれは、*asseverativo* と呼ぶべきものと思われる。単数形が *sarei saresti sarebbe*、複数形が *saremo saresti sarebbero* である。そして次のように使われる。「もし君に学識があったならば、尊敬されるだろうに」「もし彼らが愛国者であったならば、もっと幸福だろうに」⁽⁵⁾。

この箇所において提示された例文は2例とも仮定文であり、当該語形はいずれも帰結節の中で使用されている。そしてアルベルティは、条件法に相当する語形について、*Asseverativo*⁽⁶⁾ という呼称を与えた上で、接続法の一つに含めている。

3. 16世紀の文法記述

3.1. ジョヴァン・フランチェスコ・フォルトゥーニオ

イタリア語史上で最も古い文法記述が *Gram.v.* だとすると、刊行されたもののうちで最も古い文法書は、ジョヴァン・フランチェスコ・フォルトゥーニオの *Regole grammaticali della volgar lingua* 『俗語の文法規則』(以下 *Regole. volg.*) である。フォルトゥーニオは司法長官としての役職に従事しながら、1516年にアンコーナで *Regole. volg.* を出版した。第18版まで版を重ねていることから、フォルトゥーニオの作品が広く受け入れられ、書き手から実際に利用されていたことがわかる⁽⁷⁾。アルベルティとは異なり、14世紀の三大作家であるダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョの作品の言語を基にした規則を著した。全二巻からなる *Regole volg.* は、第一巻では品詞ごとに語形を記述、第二巻では主に正書法について扱っている。*Regole. volg.* における条件法相当語の記述

はやや複雑である。まず初めに当該語形が登場するのは、動詞に関する第一の規則（prima regola）の中である。

Medesimamente perché le voci del modo desiderativo si trovano nel soggiuntivo, a queste che sono necessarie valicarò:

che io, che tu, che quello ame overo ami

che noi amiamo

che voi amiate, che quelli ameno

io amerei, o ver s'io amassi

tu ameressi o ameresti, over se tu amassi

quello amerebbe o vero ameria o ver se egli amasse.⁽⁸⁾

願望法の語形は同じく接続法において見いだされるため、以下の必要な語形まで飛ばすことにしよう。

フォルトゥーニオは、願望法（desiderativo）は接続法（soggiuntivo）に含まれると述べた後、動詞 amare の接続法の活用を示している。現代イタリア語においては接続法現在（ame, ami, amiamo, amiate, ameno）と接続法半過去（ameressi, ameresti, amassi, amasse）と条件法現在（amerebbe, ameria）に分類されるものである。その後には動詞 scrivere と avere（表記は avere）、さらに essere の接続法活用体系の内に上記の語形が続く。フォルトゥーニオはこの項では語形を記述するに留め、引用を伴う詳細は動詞に関する第二の規則（seconda regola）へと譲っている。ここでは、接続法の未完了過去形（preterito imperfetto tempo del modo）の形態として、条件法に相当する語が記述される。とりわけ単数形の人称の語尾の形に注目している。

La seconda, adunque, regola sarà, delli verbi, che la prima singular persona del preterito imperfetto tempo del modo soggiuntivo, sí della prima come della seconda cogiugatione, finisce in *ei*, come *amerei*, *leggerei*; la seconda persona ha il finimento in *si*, come *ameressi*, *leggeressi*; la terza in *ia* overo in *ebbe* è terminata sempre, come quello *ameria* o *amerebbe*, *leggeria* o *leggerebbe*.⁽⁹⁾

動詞の第二規則は以下の通りである。接続法未完了過去の一人称単数形は、第一変化および第二変化動詞において、amerei, leggerei のように語末が ei となる。二人称の語末は ameressi, leggeressi のように si である。三人称の場合は、ameria あるいは amerebbe, leggeria あるいは leggerebbe のように、常に ia か ebbe で終わる。

こう述べたのち、ダンテとペトラルカを中心とした文学作品から、語形を引用している。フォルトゥーニオはアルベルティとは異なり、条件法に該当する形態をラテン語から引き継がれた既存の法である接続法の中に組み入れている。その中では語形の使い分けといった区別は特に設けていないことがわかる。

3.2. ピエトロ・ベンボ

フォルトゥーニオとは全く異なる分類をしたのがピエトロ・ベンボである。ベンボは1525年に出版された *Prose della volgar lingua* 『俗語をめぐる散文』（以下 *Prose*）第三巻の中で、文学作品での使用を推奨する語とそうでない語を詳細に論じている。その判断は14世紀の作家たちの文学作品を基準としており、韻文においてはペトラルカ、散文においてはボッカッチョを範としている。ダンテについては作家としての偉大さとその功績は認める

ものの、とりわけ言語の選択に関して批判的な姿勢を貫いているという点でフォルトゥーニオとは大きく異なっている。*Prose* の記述からは、伝統的な文法体系や用語の使用から取って距離を取ろうとする姿勢が見られる。まずベンボは「法」という概念を自らの文法記述には取り入れていない。さらに *Prose* 第三巻において、動詞全体を条件 (condizione) の有無によって二分している。前半では、条件を伴わない (senza condizione) 動詞として、現代イタリア語の直説法、命令法、不定法に該当する語形とその語法を紹介している。そして後半では、「条件を伴って語る」(si parla condizionalmente) 部分へと話を移し、この点においては俗語がラテン語よりも豊かであると述べた後に、2つの用法を説明する。

Io vorrei che tu m'amassi e Tu ameresti me, se io volessi e, come disse il Boccaccio, Che ciò che tu facessi, faresti a forza, il che tanto è a dire, quanto Se tu facessi cosa niuna, tu la faresti a forza. Ne' quali modi di ragionari, più ricca mostra che sia la nostra volgar lingua, che la latina; con ciò sia cosa che ella una sola guisa di proferimento ha in questa parte, e noi n'abbiam due. Perciò che Vorrei e Volessi non è una medesima guisa di dire, ma due; e Amassi e Ameresti, e Facessi e Faresti altresì. Nelle quali due guise una differenza v'ha, e ciò è che in quella, la quale primieramente ha stato e da cui la particella Che piglia nascimento e forma, o ancora la quale dalla condizione si genera e per cagion di lei adiviene, la R propriamente vi sta, Ameri Vorrei Leggerei Sentirei; [...]. In quell'altra poscia, che dalla particella Che incomincia o pure che la condizione in sé contiene, la S raddoppiata, Amassi Valessi Leggessi Sentissi, v'ha luogo. Della prima, è la seconda voce del numero del meno questa, Ameresti Vorresti e l'altre, e la terza quest'altra, che con la B raddoppiata sempre termina toscanamente parlando, Amerebbe Vorrebbe e Abiterebbe, che disse il Petrarca in vece di Abiterebbe, e gli altri.⁽¹⁰⁾

Io vorrei che t'amassi (君が愛してくれたら良いのだが) Tu ameresti me se io volessi (もし私が欲するならば君は私を愛すだろう) 例えばボッカッチョの場合は以下の通りです。Che ciò che tu facessi, faresti a forza. つまり Se tu facessi cosa niuna, tu la faresti a forza. (あなたが何をするにせよ、嫌々するのでしょうか) ということです。この話し方において、私たちの俗語の方がラテン語よりも豊かだと言えるでしょう。というのもラテン語がこの部分において、唯一の方法しか持たないのに対し、私たちの俗語には2つの方法があるからです。なぜならば、vorrei と volessi は一つの言い方ではなく、2つの言い方だからです。amassi と ameresti, facessi と faresti がその例であります。そうした2つの方法においては、ある違いが存在します。まず初めに置かれる語に対して che という語を取って形を成すもの、もしくは条件から生じ、その条件ゆえに起こるものです。これについては amerei vorrei leggerei sentirei のように R を固有の文字として備えています。(中略) もう一方は、che という語から始まるか、あるいはそれ自体に条件を含む場合には amassi valessi leggessi sentissi のように二重化した S が生じます。第一の語法について、二人称単数が ameresti vorresti など、そして三人称単数は二重化した B を伴うものであり、トスカナ語的に話されるときは常に amerebbe vorrebbe、そしてペトラルカが abiterebbe の代わりに使った abiterebbe のように終わります。

ここで記述される2つの用法のうちの1つ目は、現代イタリア語の条件法に相当する vorrei や amerei という語形である。ベンボはこれらの語形について、*vorrei che t'amassi* のように、che という語を伴って使われる構文的な「条件」のもとに生じ得ると説明している。さらに「条件から生じ、その条件ゆえに起こる」例として tu *ameresti me se io volessi* を示しているが、この場合は物事の成立や実現に必要な事柄としての「条件」であり、

それがあることを前提として生じる語形として提示している。

一方、接続法半過去に相当する *amassi* や *valessi* といった語については「*che* という語から始まるか、あるいはそれ自体に条件を含む」としている。つまり *io vorrei che t'amassi* のように接続詞 *che* から始まる節の中に含まれるか、*tu ameresti me se io volessi* のように、条件節の中で *volessi* 自体が条件となる場合に生じ得るという意味である。2つ目の用法においても、構文と意味の2つの異なる「条件」のもとに記述されている。ベンボはさらにもうひとつの「条件」を伴う語法を付け加えた。

Parlasi condizionalmente eziandio in un'altra guisa, la quale è questa: *Io voglio che tu ti pieghi, Tu cerchi che io mi doglia, Ella non teme che 'l marito la colga, Coloro stimano che noi non gli udiamo* e simili. Nella qual guisa questa regola dar vi posso: che tutte le voci del numero del meno sono quelle medesime in ciascuna maniera, *Io ami Tu ami Colui ami, Io mi doglia Tu ti doglia Colui si doglia, Io legga, Io oda,* e così le seguenti.⁽¹¹⁾

また別の方法においても条件を伴った話し方がありますが、それは以下のとおりです。*Io voglio che tu ti pieghi* (私は君に服従してほしい) *Tu cerchi che io mi doglia* (君は私が苦しむことを求める) *Ella non teme che 'l marito la colga* (彼女は夫が自分を襲ってくることを恐れない) *Coloro stimano che noi non gli udiamo* (彼らは私たちが話を聞いていないと思っている) など、これに類するものであります。この方法において与えることができる規則は、すべての活用において *Io ami Tu ami Colui ami Io mi doglia Tu ti doglia Colui si doglia Io legga Io oda* などのように、すべての単数形は同じ形だということです。

ベンボは「条件を伴って語る」3つ目の用法として、接続法現在に相当する語形を提示している。この用法が持つ「条件」が何を指しているのか明瞭ではないものの、提示された例にはいずれも意味的な「条件」が含まれておらず、*Io voglio* (私はほしい)、*Tu cerchi* (君は求める) *Ella non teme* (彼女は恐れない)、*Coloro stimano* 「彼らは思う」等、さらにこれに類する主節と接続詞 *che* に続く従属節の中で用いられていることから、構文的「条件」を意味するものと考えられる。このように、ラテン語文法を踏襲した既存の体系とは大きく異なる枠組みを用いたベンボによる分類、さらには現代イタリア語文法における条件法の「とある条件のもとに起こりうる動作や状態を示す」という基本的な語法を「条件」という用語を用いて指摘した点は革新的かつ独創的である。

3.3. ジャン・ジョルジョ・トリッシノ

Prose の4年後に出版されたジャン・ジョルジョ・トリッシノによる *Grammaticetta* 『小文法』においては、対象となる言語を書き言葉に限定しておらず、過去の文学作品からの引用も行っていないという点で、フォルトゥーニオやベンボとは異なる立場を取っている。トリッシノによる法の分類には以下の通りである。

quellø che dinota dubitazione et ad un altrø verbø si sogggiunge è dettø «soggjontivø» [...]. E questø cõtale soggjontivø è doppjø, perciò che alcune volte rende la causa del dubbjø, cõme è *s'io fosse allegro canterei e s'io fosse dettø scriveria*; e questø si potrà kiamare «soggjontivø redditivø». ⁽¹²⁾

不確かさを示すもので、かつ別の動詞へと接続するものは *soggjontivo* と言われる。(中略) そしてこの *soggjontivo* には二重のはたらきがある。というのも、時に不確定であることの原因となるからである。

たとえば「もし私が陽気ならば、歌うのだが」「もし私が博識であるならば、物を書くのだが」のように。そしてこれは *soggiontivo redditivo* と呼ぶことができるだろう。

ここではトリッシノによる接続法の定義が記述されているが、その中で *soggiontivo redditivo* という新たな用語を用いて条件法に相当する語形を区別している。提示された2つの例はいずれも仮定文であり、その帰結部の方に含まれる動詞 *canterei, scriverea* について述べていることが、この先で明らかになる。敢えて文法用語を避けた迂遠な表現によって法や時制を説明した *Prose* に対し、*Grammaticetta* の中では伝統的な図式に則った記述がなされている。法について述べた後、能動態 (*attivō*) について時制ごとに順番に説明している。そのうち過去および未完了過去 (*Il tempō passatō e non compitō*) の項で、条件法に相当する語を提示している。

Nel sogg. redditivō e nel sig.: *io honoreria, tu honoreresti, quello honoreria*; nel plur. *noi honoreressimō, voi honorereste, quelli honoreriano*. E toscano: nel sing. *io honorerei, tu honoreresti, quello honorerebbe*; nel plur. *noi honoreremmo, voi honorereste, quelli honorerebbero* ⁽¹³⁾.

soggiontivo redditivo の単数形は、*io honoreria, tu honoreresti, quello honoreria* である。複数形は *noi honoreressimo, voi honorereste, quelli honoreriano* となる。以下はトスカーナ語である。単数形は *io honorerei, tu honoreresti, quello honorerebbe* となり、複数形は *noi honoreremmo, voi honorereste, quelli honorerebbero* である。

トリッシノは16世紀当時の俗語におけるトスカーナ語の重要性は認めつつも、文学作品におけるフィレンツェ語の優位性を否定している。彼が提唱するのは特定の時代や地域に限定せず、様々な方言から抽出した言語からなる折衷的な言語である。上記の引用に見られるように「イタリア語」と「トスカーナ語」を明確に区別した記述が特徴的である。

3.4. ピエルフランチェスコ・ジャンプラーリ

フィレンツェ人ジャンプラーリによって、初めてフィレンツェで *Regole della lingua fiorentina* 『フィレンツェ語の規則』(以下 *Regole fior.*) が出版されたのは1552年のことであり、フォルトゥーニオによる *Regole volg.* の出版から実に30年以上が経過していた。この *Regole fior.* においては、ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョといった14世紀の作家たちの権威を否定せずに引用として作品内に多数取り入れると同時に、教養ある16世紀当時のフィレンツェ人の生きた話し言葉をも反映するという著者の穏健な姿勢が表れている。全8巻のうち、第一巻「動詞について」の項において、接続法 (*soggiuntivo*) と願望法 (*desiderativo*) の *pendente* ⁽¹⁴⁾ という時制の中で条件法相当語形を提示している。たとえば動詞 *essere* の場合には以下の通りである。

Desiderativo pendente; sarei; saresti; sarebbe et fora; saremmo; sareste; sarebbono et sarebbero. [...]

Soggiontivo pendente; sarei; saresti; sarebbe; saremmo; sareste; sarebbono et sarebbero. ⁽¹⁵⁾

このように、ジャンプラーリは願望法 (*desiderativo*) と接続法 (*soggiuntivo*) の *pendente* として、ほぼ同じ語形を選択していることから、新しい文法的カテゴリーを設けることはせず既存の枠組みの中に収めていることがわかる。

3.5. レオナルド・サルヴィアーティ

サルヴィアーティはクルスカ・アカデミー (Accademia della Crusca) の創設者として辞書編纂に携わったことと、『デカメロン』の抜本的な改訂を実施したことで知られるが、彼自身もまたトスカーナ語の文法書 *Regole della toscana favella* 『トスカーナ語の規則』(以下 *Regole tosc.*) を著している。正確な執筆時期は不明だが、1576年頃とされている⁽¹⁶⁾。*Regole tosc.* では文学作品からの引用はせず、品詞ごとの語形の分析のみで構成されるが、とりわけ動詞に多くのページを割いている。そのうち法に関しては、動詞の語形変化について (Degli accidenti del verbo) という項の中で以下のように述べている。

Il verbo à modi, tempi e numeri e, ultimamente persone; [...] *soggiuntivo*, o *condizionale*, che o a condizione vien congiunto o condizione impone egli a ciò che egli viene appresso [...].⁽¹⁷⁾

動詞には法、時制、数、そして最後に人称がある。*soggiuntivo* あるいは *condizionale* とは、条件に接続するか、あるいは後に続くものに対して条件を課すものである。

さらにその先では動詞 *avere* の活用体系を提示しているが、そのうち接続法 (*soggiuntivo*) の「未来にかかわる現在」(*presente riguardato come futuro*) として条件法に相当する語を提示している⁽¹⁸⁾。サルヴィアーティは条件法に相当する語を接続法に含めているものの、ベンボによって使われた用語である条件 (*condizione*) という語が使われて以来、法の名称として条件法 (*condizionale*) を接続法と並べたという点は注目すべきである。

4. おわりに

16世紀の文法記述において、条件法に相当する語について言及された部分を整理すると、新しい用語の有無等の違いがあるものの、その多くは条件法に相当する語形を接続法の一部として組み入れた。その一方でベンボはラテン語を踏襲した伝統的な枠組みからは距離を置きながら、「条件」の有無で動詞体系を二分するという独自の方法を取った。本稿で論じたように、ベンボによって初めて使われた条件 (*condizione*) という用語は単一の語義として捉えることはできないことから、一貫性の欠如を指摘されることはあるものの、イタリア語史における条件法の記述を知る上で重要な観点であることには間違いなさだろう。

註

(1) 長神 (2018: 183-187).

(2) Patota (2007: 166).

(3) D'Achille (2005: 98).

(4) Patota (1996: 33-34).

(5) *Gram. v.* § 58.

(6) *Gram. v.* § 65で動詞 *amare* の活用体系を説明する際には、綴りの異なる *Assertivo* という語を用いている。

(7) Trovato (1992: 96)

(8) *Regole volg. I.* § 138.

(9) *Regole volg. I.* § 160.

(10) *Prose III.* § 43-44.

(11) *Prose III.* § 45.

(12) *Grammaticchetta.* § 21.

トリッシノは *Grammatichetta* において、新しい文字を導入することで o と e の母音を区別するという試みを行った。o の場合は、閉口音は「o」、開口音は「ω」と定めた。e の場合は、閉口音は「e」、開口音は「ε」で表記している。

(13) *Grammatichetta*, § 29.

(14) *pendente* という語は一般的に「ぶら下がった」「未解決の」を意味するが、文法用語として用いられる場合は、*imperferto* つまり「未完了」の意味で用いられる。

(15) *Regole fior.* § 43, 46.

(16) *Regole tosc.*, Introduzione, 22.

(17) *Regole tosc.* 159.

(18) *Regole tosc.* 165. Soggiuntivo; Presente riguardato come futuro: avrei e arei, avresti e aresti, avrebbe e arebbe, avremmo e aremmo, avreste e areste, avrebbero e arebbono

【文献一覧】

【テキスト】

Alberti L. B.

Gram. v. Grammatichetta, in *Grammatichetta e altri scritti sul volgare*, a cura di Giuseppe Patota, Roma, Salerno Editrice, 1996.

Bembo P.

Prose Prose della volgar lingua, Prose e rime, a cura di Carlo Dionisotti, Torino, UTET, 1966.

Fortunio G. F.

Regole volg. Regole grammaticali della volgar lingua, a cura di Brian Richardson, Roma, Antenore, 2001.

Giambullari P.

Regole fior. Regole della lingua fiorentina, a cura di Ilaria Bonomi, Firenze, Accademia della Crusca, 1986.

Salviati L.

Regole tosc. Regole della toscana favella, a cura di Anna Antonini Renieri, Firenze, Accademia della Crusca, 1991.

Trissino G. G.

Grammatichetta Grammatichetta, in *Scritti linguistici*, a cura di Alberto Castelvechi, Roma, Salerno, 1986.

【参考文献】

Cortelazzo M. A.

2001 Michele A. Cortelazzo, *Sondaggi sulla terminologia grammaticale nelle Prose: il verbo*, in “*Prose della volgar lingua*” di Pietro Bembo, a cura di S. Morgana, M. Piotti, M. Prada, Milano, Cisalpino.

D'Achille P.

2005 *Breve grammatica storica dell'italiano*, Roma, Carocci.

Patota G.

1996 Leon Battista Alberti, *Grammatichetta*, in *Grammatichetta e altri scritti sul volgare*, a cura di Giuseppe Patota, Roma, Salerno, 1996.

2007 *Nuovi lineamenti di grammatica storica dell'italiano*, con esercizi a cura di Gianluca Lauta, Bologna, Il Mulino.

Petrilli R.

1986 *Le forme in -rei e il termine 'condizione' nelle grammatiche italiane*, in *Linguaggi*, 111, 1-2, pp. 23-31.

1991 *Tradizione ed eresia nella grammatica italiana rinascimentale*, in *Tra Rinascimento e strutture attuali -Saggi di*

linguistica italiana- a cura di Luciano Giannelli, Nicoletta Maraschio, Teresa Poggi Salani e Massimo Vedovelli, Rosenberg & Sellier, Torino.

Poggiogalli D.

1999 *La sintassi nelle grammatiche del Cinquecento*, Accademia della Crusca, Firenze.

Trovato P.

1992 *Storia della lingua italiana -Il primo Cinquecento-*, a cura di Paolo Trovato, Il Mulino, Bologna.

長神悟

2018 イタリア語の ABC [改訂版]、東京、白水社

